

# スタンダード研究会会報

**(2013) No. 23**

2013. 06.01

## 目次

### 研究会発表要旨

- ・『恋愛論』「断章」(Fragments divers)を読み解く(杉本 圭子)  
… 3
- ・恋するドン・ジュアンの死 ファブリスの永遠の恋 (下川 茂)  
… 4
- 書評 (杉本 圭子) … 6
- 半月に棲むうさぎ 鈴木昭一郎先生の三回忌に寄せて (寺西暢子)  
… 9
- 会員活動報告 … 13
- 編集後記 … 15

## 【研究発表要旨】

第 58 回 (2012 年 6 月 2 日 東京大学本郷キャンパス)

### 『恋愛論』 「断章」 (Fragments divers) を読み解く

杉本 圭子

『恋愛論』末尾の「断章」については、研究者の間でも正面から論じられることは少ない。内容的には第一巻、第二巻とかなりの重複を見せるが、本論にはなかった要素が新たに付け加えられている場合も少なくない。たとえば趣味恋愛に対する情熱恋愛の優位を説く断章(断章 8)では、末尾に「伯爵夫人 L、フォルリ、1819 年」という日記風のメモが記され、L はマティルデ・デンボウスキーを示す符牒であることから(Léonore)、第一巻で一般的真理のようにして提示されていた命題の裏に、著者の個人的な体験があったことが示唆される。本論と同様、「断章」でも青年リジオ・ヴィスコンティの遺著の翻訳というフィクションが維持されているにもかかわらず、数々の「私」の刻印はあつけらかんとそれを裏切る。

「断章」にはまた、本論で述べられた説を補強する逸話、敷衍説明、新たな文献を援用しての論証などが数多く盛り込まれている。「女の自尊心」(l'orgueil féminin) についての複数の断章がその例である。ただし、本論では独立した章を構成せず、叙述の中に埋没しがちであったテーマを「断章」で個別にとりあげる例もあり、たとえば「自然さ」(Naturel) と題された断章 34 では、第 1 巻第 32 章(「親密な仲になることについて」とは異なり、女性の側からみた「自然さ」(ただしこれが裏目に出る例)が物語風に扱われている。また、断章 64 では「上品ぶる女」(Prude) について、本論中では章を削除したと述べ、そのかわりイギリスの小説家ホレース・ウォルポールの回想記を引用して、prude のなかの prude、エリザベス一世を批判している。

ただ、断章形式という性質上、個々のテーマについての記述は断片的で、これらを秩序立てて並べ、分類し、体系化しようという意志は感じられない。いっぽうで「イデオロギーの書」としての面目躍如たる側面もあり、たとえば断章 91 のエルヴェシウスの快苦原則への言及は、スタンダールによるエルヴェシウスの思想の修正案として興味深い。さらに「形而上学的夢想」(Rêverie métaphysique) と題する長大な断章 121 では、快樂よりも苦痛が人間に与える印象のほうがずっと強いというその理由が、伯爵令嬢フルヴィアと語り手の「私」との対話形式の中で明かされる。すなわち、経験論者の用語「観念連合」を模した「感覚連合」(alliances de sensations) という概念によって、「想像した事柄は実在すると考えてしまう」感受性豊かな恋人は、つれない恋人をも想像力で埋め合わせて理想の恋人に変貌させてしまう。これはまさに、スタンダールが第一巻冒頭で開陳した「結晶作用」のメカニズムと一致する。実際にはないものを見てしまう精神の錯誤、恋の苦しみを快樂へと転化してしまうこの精神の働きを、世間は理

屈に合わないと思われ、手厳しく批判したが、スタンダールにとってはごく自然な営為であった。断章 164 では自らの愛読書、ハッチンソン夫人の回想記から、先ごろ亡くなった見ず知らずの女性に熱烈にほれこみ、憔悴して死んでしまった男の逸話を引き、「結晶作用という名の狂気についての風変わりな証拠」として提示している。スタンダールがこうして「断章」の中で、自らの恋愛論の本質をなす部分にくりかえし触れている点に、なによりも人に理解されたいという強い願望のあらわれを見てとることができるだろう。

第 59 回 (2012 年 12 月 22 日 京都大学楽友会館)

### 恋するドン・ジュアンの死 ファブリスの永遠の恋

下川 茂

『パルムの僧院』の主人公ファブリスのドン・ジュアンの性格については、既に詳しく Nathalie Prince が論じている(« De l' amour dans *La Chartreuse de Parme* : Fabrice et don Juan », *H.B.*, No 2, p. 217-226 )。Prince によれば、「バロック的ドン・ジュアン」ファブリスは獄中でクレリアによって「救済され」、「モーツァルトのオペラのドン・ジュアン」、恋する「不純なドン・ジュアン」、「ロマンティックなドン・ジュアン」、ウェルテル化したドン・ジュアンとなる。そして、「小説の最後の頁で死ぬのはウェルテル」である。

しかし、ファブリスは本当にウェルテルとして死ぬのだろうか。Prince は、二度目の獄中でファブリスがクレリアについた嘘が、「バロック的ドン・ジュアン」ファブリスの最後の行為であるとする。確かに、その後ファブリスはクレリアに嘘をつくことはないが、「嘘」だけがドン・ジュアンの策略ではない。毒入りの食物を口にしようとしたのは嘘だと告白した直後、ファブリスは毒殺死のイメージを長々とクレリアに語って、彼女の怒りをかわしている。「純粋なドン・ジュアン」チェンチも「人間の行為の動機を明確に見抜く生き生きとした明晰な才知の持ち主」だった (*Les Cenci*)。ジーナに勧められて始めた説教はすぐにクレリアを誘惑する手段となり、恋と信仰の「魂の戦い」で「青ざめた」クレリアの顔を「よく見る」ために、ファブリスは教会を「数多くの蠟燭」で照らさせる。説教による誘惑が成功して「この上ない幸福」を手に入れても、ファブリスは満足せず、口ではクレリアの聖母への誓いを尊重すると言いながら、白昼度々彼女の姿を見て、彼女に誓いを破らせようとする。そして、クレリアを「情熱的に罪を犯すのと同様に、情熱的に神に許しを乞う」(*Les Cenci*) 恋人にするために、ファブリスは、残酷さにおいてチェンチに劣らぬ精神的暴力をクレリアに行使するに至る。

ファブリスはなぜ息子サンドリーノを奪取しようとするのか。ファブリスの計画にクレリアは抵抗できず、彼女の信仰を犠牲にして計画は実行され、息子の命が危ぶまれても、ファブリスは計画を中止しない。そして、息子の病中、クレリアは誓いを破ることになる。ファブリスの「いかにも自然な望み」に隠されていたのは、クレリアが聖母への誓いを破ることではなかったか。「サンドリーノの病中、灯りのもとで度々彼女はファブリスを見た。しかも白昼二度までも、恋心に我を忘れて見さえた」。スタンダールの曲言法でぼかされているが、ファブリスは、ついに「情熱的に罪を犯すのと同様に、情熱的に神に許しを乞う」恋人となったクレリアと、互の姿を見ながら愛の行為を行うことができた。

息子を恋の犠牲としたクレリアは、息子の死後生きてはいられず、ファブリスも愛するクレリアが死ねば生き続けることができない。僧院に隠遁したファブリスは今度こそウェルテルとなったか。「ファブリスは自殺という手段に訴えるにはあまりに愛し、あまりに信心深かった。彼はよりよい世界でクレリアに再会したいと思っていた。しかし、あまりに才知があったので、償うべきことが沢山あると感じないではいなかった」の、「あまりに才知があったので」は、ファブリスがドン・ジュアンの恋の罪を本当に自責していたかどうかを疑わせる言い回しである。来世でクレリアと再会するには「自殺」の罪を犯さないだけでは足りず、「沢山」のことを償うことが必要だと彼は「才知」で理解し、そのために財産を処分し、公職を辞し、僧院に隠遁した。このファブリスの「才知」は神の意思をも操ろうとするドン・ジュアンのものではないか。隠遁と贖罪によって彼が来世で再会することを願うのはクレリアであって息子ではない。息子を自らの欲望の犠牲にしたことをファブリスが自責したとは私には思えない。罪を自責せず、恋人と来世で再会することだけを目的として隠遁するファブリスの信仰は、正統的キリスト教信仰でないのはもちろん、イタリアのカトリック信仰からも大きく逸脱したものである。現世でドン・ジュアンの恋を実現したファブリスは、来世でクレリアに再会しても、現世にいるときと同じ、自己中心的・利己的な愛で彼女を愛そうとするだろう。

『恋愛論』の「第49章 フィレンツェの一日」で、イタリアの「永遠の恋」の実例が語られている。R僧正とD夫人の関係は34年前から続いているが、「この恋仲には憂愁の影がある。かつて夫が息子を毒殺したためだと言われている」。D夫人の息子は夫によって毒殺されるが、サンドリーノは父ファブリスの利己的な愛の犠牲になって死ぬ。息子の死を悼みながら、R僧正とD夫人は姦通に寛容なイタリア社会で彼らの「永遠の恋」を生き続けるが、ドン・ジュアンの恋の快楽を味わい、悔悟しないファブリスとクレリアは息子の死後生きながらえることはできない。しかし、現世で「二度」しか体験できなかった快楽を、彼らは「より良い世界」で永遠に味わい続けるだろう。それが、現実のイタリアの「永遠の恋」とは異なる、恋するドン・ジュアン、ファブリスの永遠の恋だった。

## 書評

Renée Dénier, *Count Stendhal : Henri Beyle et l'Angleterre*, Philippe Rey, 2012.

杉本 圭子

表題は、1818年にイギリスの評論誌『エクレクトック・レビュー』(*Eclectic Review*)がスタンダールに贈った称号に基づく。『イギリス通信』の編者・翻訳者のひとりであり、スタンダールとイギリスというテーマに関しては第一人者といってよいルネ・デニエの、まさに研究の集大成である。ただ、表紙カバーに用いられているヨハン・ソードマルク画の晩年のスタンダールの胸に、ユニオンジャック柄の缶バッジが光っていることからわかるように、本書は充実した内容のなかにも適度な娯楽性を残した、上質な読みものとなっている(たとえば研究書につきものの注釈はなく、引用元の詳しい表示もない)。

二部構成の第一部は当時の英仏の二国関係の概観からはじまり、ナポレオン戦争終結後に両国間で文化的、人的な交流が再開されると、美術・文芸、風俗(社交クラブ、乗馬、ダンディズム)、物品(「イギリス製のはさみ」)、ファッション(黒ずくめの服装)に至るまで、イギリスかぶれ(anglomanie)の嵐がフランスに吹き荒れたことが述べられる。身づくろいに余念のないジュリヤンも、リュシヤンも、その作者スタンダールも、まちがいなくこの流れの中にいた。シェークスピアや18世紀の小説家リチャードソン、フィールドングやスターン、ロマン派のバイロン、スコットを、スタンダールがどう受けとめたか、そしてその影響の射程は最晩年の小説群にまで及ぶことを、デニエは再確認する。

だがデニエの論考の真骨頂は、語学的な側面をめぐる数々の刺激的な指摘にある。ナポレオン戦争期の政治的緊張の中で、英語を解するフランス人はまれであったこと、交流再開後は多くのイギリス人がパリに押し寄せ、イギリス関連の書籍や翻訳が相次ぎ、英語の学習熱がおこったことが背景として示される。英語からの借入語は生活全般に及び(*lady, high life, fashionable, le lion, bookmaker, steamer...*)スタンダールが用いた語彙の中には、当時のフランス人にはまだなじみのなかったものから(*reporter, preferment*)、彼自身が語の定着に一役買ったもの(*tourism, egotisme*)まである。ただしこの最後の二語については、結局は定着しなかった *puff, cant* の語などと同様、スタンダールは原語の意味に、その時代の文脈に沿った独特のニュアンスを付け加えている(*puff* は平気で仲間に肩入れするジャーナリストたちの書く「宣伝文」、*cant* は宗教的、党派的「偽善」を表す)。

スタンダールと英語、というテーマに捧げられた第一部第三章の内容は非常に読みごたえがある。シェークスピアを原典で読みたい一心ではじめられた英語の学習は、1802年のパリ時代にさかのぼる。原文の行間にフランス語の逐語訳を連ねていくという地道な自習の方法にはじまり、イエキ神父、グッドソン氏...と師を替えながら細々と続けら

れた。しだいに語彙も増え、バイロンやスコットの仏訳にけちをつけるようになり、1820年代のイギリス雑誌への投稿の際には、翻訳者の翻訳の質を見分けられるまでになる。ただし会話には苦労したようで、イギリス滞在中の日記には苦い体験が書き連ねられている(ただしデニエによれば、フランス語で英語の音を再現している箇所から判断すると、スタンダールはなかなかよい耳の持ち主だったということである)。

スタンダールがテキストの中で英語を使用する頻度は、出版を前提としていたかそうでないかによってかなりの差がある、と氏は指摘する。スタンダールが私的な書きもの(手紙、日記、回想記)の中で、イタリア語と並んで英語を多用していたことはよく知られており、こうした英単語の無秩序な増殖を、われわれ研究者はあきれ顔で見てきた。いっぽうデニエによれば、小説家としてのスタンダールはどちらかといえば古風な語彙を駆使する作家で、新語(néologisme)の使用についてはかなり慎重であった。フランスの読者にも通じる語彙、英語でなければ指し示せない事物に関する語彙を用いるだけで、その場合にもフランス語訳を添えていた。こうした表記法は自伝や評論、旅行記の類ではかなり頻繁になり(«bien moins *striking*, *frappante*»), その逆のパターンも多く認められる(«*défaut (drawback)* »)。

私的な書きものの中でスタンダールが英語を使う場合、それは知識のひけらかしのためではなく、想念したいが英語で浮かんだためであったろう。さらに妹をはじめとする近しい間柄の者を英語の呼称で読んだり(sister) 父親を the bastard という表現で呼んだり、情事を *affairs of love* と書いたり、ルイ・フィリップを king と呼ぶに至っては、秘密の保持という動機がはたらいていたことは明らかである。自我の根幹にかかわる、もっともデリケートな部分(自我、書くこと、恋愛、幸福...)について英語を使用する、ということもあった(*Mr Myself, my books, happy by love...*)。こうした英語はしばしば誤りを含み、例によってスタンダールの韜晦癖のひとつと片づけられることも多かったが、彼の英語は気まぐれで統一性を欠いているものの、言葉の使いかたは適切であり、限られた語彙(約700語!)のなかで良質な多様性を見せている、とデニエは指摘する。

章の最終節では、スタンダールのフランス語がいかに「英語の畏」にとらわれていたかを論じている。すなわち類似した英語の語彙に引きずられ、フランス語の単語を英語的な意味で使っている場合(caractèreを「登場人物(character)」の意味で用いる)もともとフランス語からの借入語であった英単語に引きずられ、近代フランス語からはすでに失われた意味で単語を使っている場合(vexerを「困らせる、苦しめる(vex)」の意味で用いる)。あるいは英語的接頭辞や接尾辞をつけて、ありもしないフランス語の単語を作り出したり(*indévôt*) 英語の-ing形からの発想で、-antで終わる形容詞を増殖させたりする(*la Chambre discutante*)。はたまた英語の語順に引きずられ、名詞の前に形容詞を置いてしまう(*un singulier goût*)。ただしこうした奇抜な用法が、スタンダールの語彙を豊かなものにし(たとえば英語の形容詞 *dazzling*「目のくらむ

ような」をフランス語の名詞 *le dazzling* 「魅力」として用いる) 彼の文体を現代的なものにしているという指摘は、スタンダールのテキストの隅々にまで通曉し、英仏二つの言語のあいだを自由自在に行き来する卓越した言語能力の持ち主でしかなしえないものであり、読みながら軽い戦慄を覚えた。

第二部も第一部に劣らず密度が濃い。スタンダールが書物によって得たイギリスとイギリス人についての知識を概観したあと(とりわけスタンダールのイギリス観の形成に大きく寄与したバート(Baert)のイギリス論(*Tableau de la Grande-Bretagne, de l'Irlande...*, 1800)をめぐるとは重要) 今度は1817年、1821年、1826年の3度のイギリス旅行を通じて、スタンダールの先入観がいかに強化あるいは修正されていたかが、時間軸に沿って丁寧に論じられる。ナポレオンを虐待した悪い国というイメージは、当然のことながら現地の教養ある人々と交わり、魅力的な女性たち、名優たちの舞台、先進的な政治制度を目の当たりにすることによって薄れていく。田園の美しさも彼を魅了する。いっぽうで宗教が人々の生活を隅々まで支配する陰気な国、一部の貴族が貧民を容赦なく切り捨てる国、功利主義の国といったイメージは、根強く彼の中に残った。

ここでも日記、書簡、自伝、小説、書評、サロン評、旅行記といった時期も性質も異なるテキストが融通無碍に引かれ、しかも元の文脈をゆがめない形で俎上に乗せられ、まったく危ういところがない。とりわけ、スタンダールの小説にはスタール夫人の『コリンヌ』におけるような、典型的なイギリス人の人物が登場しないことを指摘したうえで、『パルムの僧院』の草案に登場し、結局は削除されたイギリスの負傷兵、ワーニー大尉(*le capitaine Warney*)が、いかに典型的なイギリス人の性格(傲慢、嫉妬深さ、陰鬱さ)をもって描かれていたかを論じるくだりは、非常に興味深かった。

こういうものを大家の貫録というのだろうか。日ごろ氏の研究に深い敬意を抱いてきた私は、この一冊を通じて尊敬の念をあらたにした。氏の持ち味である、軽快なユーモアに支えられた、明快で風通しのよい文体もまた、こういう文章を書きたいと強く私に願わせるものであった。

半月に棲むうさぎ  
鈴木昭一郎先生の三回忌に寄せて

寺西暢子

アポロ何号だかが、月面に着陸したとかで、その映像がテレビのチャンネル全てを占拠してしまったのはいつだったろうか？自然科学の進歩に人類の限りない進化の夢を託すのも悪くはなかったのだろう。だが、子供だった当時も、今も、私自身は、「お月様にはうさぎが棲んでいて、十五夜にはお餅つきをする」と言った類のお話に気持ちを飛ばす方が好きだ。だから、どのチャンネルを回しても、同じ映像ばかりだったあの晩、「人類の偉業」に感嘆するよりも、楽しい夢を壊されたような気持ちの方が強く、テレビの前を離れてしまった。

===

『フィクションがいかにか歴史を創るか 借用・交換・交差』と題したコロックが、京大仏文研究室と関西日仏学館との共催で、日仏学館の稲畑ホールで開催されたのは、2011年11月18日～20日であった。私も出席させて頂いたのだが、過去数年に渡り、体調を崩していたため、本格的な学術的催しに参加するのは、2005年の春の仏文学会以来である。プログラムを拝見した限り、興味深い発表が沢山あったが、集中力が続かずに、疲労のため、いくつかの発表を拝聴するのを諦めざるを得なかったのは残念であった。それでも、近年、趣味と気分転換から始めたバレエ鑑賞をきっかけに、オペラや映画等も含めて、文学とは異なる表現形式の芸術作品と、文学作品との関連性や相違点等に関心を持ち始めた私には、*la Compagnie D'ores et déjà* の *Notre terreur* の舞台に触れつつ、歴史と創作の関係を論じた Eric Avocat 氏の発表が、非常に面白かった。氏のフランス語は分かり易かったが、当方の能力不足で、100%理解出来なかったことが情けない。杉本淑彦氏の « *Témoignages et histoires sur l'expédition d'Egypte de Bonaparte* » については、詳細なハンドアウトが添えられていたので、大いに助かった。二日目の田口紀子氏の発表は、1820年代を中心とした歴史小説と当時の演劇との関係を論じたもので、スタンダールの『赤と黒』にも言及がなされていた。その際、私は、改めて、自分が、スタンダールの小説作品を「歴史小説」として捉えたことがないことに気づかされ、今後、機会があれば、今までとは視点を変えて、読み込んでみたいと思った。最終日の多賀茂氏のバルトに関する発表にも大いに気をそそられていたのだが、田口氏の発表を聞いた後、私用で奈良に足を伸ばし、翌日、知人との会話が弾んでしまい、多賀氏の発表は聞き損なってしまった。コロックの出版が待たれる。

===

『会報』N°21に掲載された「鈴木先生のこと」の中で、粕谷祐己氏は、先生のお宅にお焼香に伺われた時のことを語られながら、「先生へのご恩返しはこれからでも遅く

はないと感じました。」と書かれておられた。私自身、その言葉に、一方では慰められたものの、他方、岩本和子氏の「鈴木先生へ」の中の、「(ポーリーヌに子供が居なかったことに触れた)デル・リット先生の言葉、むしろそれに対する鈴木先生のこだわりを思い出しました。」という一節も頭に残っていた。私が指導をした学生の中に、先生のご著書を読んで良い卒論を書いた女子学生が居た、あるいは、そのうちのひとりは今でも連絡をくれている、と言ったお話を、先生のご生前にお伝えしておけば、先生は喜んで下さったのではないか。ならば、先生が遺されたお仕事が、様々な形で、若い世代に引き継がれて行っていることを、せめて、奥様にお伝えしておきたい、そんな風に思った。勿論、粕谷氏がお焼香に伺われたと聞いて、少し、羨ましくなったということもある。奥様とは面識もないのに厚かましいかと躊躇もしたが、これ以上、後悔を残したくなかったので、上述のコロックが終了した翌日の21日、これも私用で出かけた北野天満宮から、鈴木先生のお宅に電話を入れさせて頂いた。事前にご連絡しなかったのは、奥様に気を遣わせたくなかったからで、なるべくさりげない口調で、「近くまで来ましたので、寄らせて頂ければ...。」と申し上げた。その時、時間は、午前11時前であった。私の突然の来訪の希望に対して、奥様は「午後2時か3時頃にして欲しい。」と仰る。私は、「やはり、ご迷惑だったろうか?」と思いつつも、ご提案の時間に合わせてお約束をし、お宅までの行き方を教えて頂いた。空いた時間を利用して、五条烏丸のホテルに戻り、荷物をピックアップして、京都駅へ向かい、予定していた新幹線の時間を遅らせたところまでは順調だった。されど、11月の京都と言えば、言わずと知れた紅葉シーズンである。まだ、昼前と言うのに、コイン・ロッカーが一杯で、暫く、探し回ったが、何処も空いていない。半ば、諦めかけたその時、私の目の前で、幸運にも、荷物を引き取りに来た女性客がおり、他にも、空きのコイン・ロッカーを探して、うろうろしていた観光客は沢山居たのだが、たまたま、その時、私が立って居たところの目の前のロッカーが空いたのだ。電話での奥様の反応が、幾分、苛立っておられるような印象があったので、私は、いささか、気弱になりかけていた。そんな私にとって、この偶然は、何となく、鈴木先生が「遠慮せずにいらっしゃい。」と仰って下さっているような気がした。

その後、お約束した時間を見計らって、地下鉄で北大路まで行き、そこからタクシーを拾った。滞仏経験のある方には実感して頂けると思うが、住所から個人の家を探す時、日本の町名・番地のシステムは、欧州各国のそれと比べると、極めてやり難い。先生の奥様から聞いた説明を元に、タクシーの運転手さんに車を進めて貰ったものの、運転手さんもあまりよく分からない様子で、「紫竹上高才町〇〇はこの辺のはずですが...。」と言って、自信なさげに車を止めた。タクシーの窓から外を見る。と、「鈴木」という表札が目に入った。

鈴木先生のお宅だろうか?だが、偶然にしては出来過ぎているような気もする。そもそも、「鈴木」という姓など、いくらでもころがっていきそう。タクシーを降りて、ひ

と回り、その「鈴木」という表札のついた家の建物を観察した。山本明美氏の「燻銀とマジンガーZ」の中で、先生のご自宅が描写されていたのを思い出しながら、眺めてみたが、その限りでは、どうやらそれらしいお宅である。更に、一応、その近辺に、他に「鈴木」と言うお宅がないか、探索してみたが、見当たらない。そこで、おそるおそる、インターホンを押したところ、間違いなく、鈴木先生のお宅であった。奥様は、「分かり難くありませんか。」と言われると、「(近隣の分かり易いお店の名前を)お教えしておけば良かったのですが。」と、何度も仰って下さった。

先生の遺影が飾られている和室に案内され、御霊前にと用意して来たお花をお渡しした。ご葬儀という訳ではないから、白い菊の他に、あまり淋しくならないようにと、淡い色の小花を少し加えて貰った。奥様は、お花を立派な陶器の花瓶に生けられると、ご年配の方にはいささか手に余りそうな花器を私の前に差し出し、「重いので運んで下さい。」と、私に仰った。あまり気の利く方ではない私は、奥様のその人遣いの上手さときさくなご気性にほっとさせられた。先生の遺影の前に正座し、お線香を上げながら、しばし、ゆっくりと先生とお話をさせて頂いた。それから、和室のお隣のダイニングで、お茶とお菓子をご馳走になった。奥様は、鈴木先生がお好きだったというお菓子を2種類、出して下さった。ひとつは、紅白の軽い食感の生地を薄い煎餅状に半月の形に伸ばしたものに、半生の餡が挿んである。紅白の半月にはうさぎの目と耳が描かれており、その半月は、半月のようにも見えれば、うずくまったうさぎのようにも見える。もう一種類は、生の生地を棒状に練った菓子で、外側は白いが、輪切りにすると、やはり、うさぎの頭が見える。おいしいお菓子とお茶が揃えば、少し、年は離れていても、女同士のお喋りに花が咲く。奥様は、京都生まれの京都市育ちとのことで、その会話のノリは、私に奈良女子大の女子寮で過ごした頃の友人との他愛のないお喋りを思い出させてくれた。戦中戦後の暮らしや奥様の学校時代のお話、先生とお親しかった(中世文学がご専門だった)故山本淳一先生や、鈴木先生と同じ時期に日仏学館で授業を受けた Pierre Devaux 先生のこと話題に上った。楽しいお喋りは尽きることなく、新幹線に乗り遅れないよう、私が辞去せざるを得なくなるまで、会話が途切れることはなかった。

帰り際、奥様は、私に綺麗に包装された小ぶりの薄型の箱をふたつ、手土産にと渡して下さった。お菓子屋の包装紙であったため、その場では、何処か、お宅近くのお店で買い求められたものと思っていた。自宅に戻って包装を明けた時、封緘のシールが高島屋のシールであることに気づいた。何のことはない、奥様が、私に訪問の時間を少し、遅くして欲しいと仰ったのは、私に持たせる手土産を探して、四条河原町の高島屋にまでお出かけになるための時間が必要だったからなのだろうか。奥様に気を遣わせまいと、わざわざ、事前に連絡せず、当日、さりげなく寄らせて頂こうと思った私の目論みは、ベテランの専業主婦である奥様の手腕の前にあっさりと躲かれてしまったらしい。頂いたお菓子のひとつは、和三盆の落雁であり、もうひとつは、お宅でもご馳走になった紅白の半月のうさぎであった。

===

今、天空におられる鈴木先生は、うさぎのついたお餅を召し上がっておられるだろうか。ご自身、お料理上手で、他方、京都の洗練されたお菓子に慣れておられる先生が相手では、月のうさぎの餅つきも、さぞ、熱が入るだろう。あるいは、天空のお団子の、人知の及ばぬ、えもいわれぬ美味に、先生は、舌鼓を打っておられるのかも知れない。

(2013年4月初旬)



## 【会員活動報告】

2012年4月1日～2013年3月31日

ジュリー・ブロック編 『受容から創造性へ—日本近現代文学におけるスタンダールの場合』、国際高等研究所（高等研報告書 1202）、2013

### 【同書掲載論文】

岩本和子「アンリ・ベールと妹ポーリーヌの手紙にみる〈創造性〉」、『受容から創造性へ—日本近現代文学におけるスタンダールの場合』、p.73-78.

小野潮「シャトープリアンを日本語に翻訳する」、p.201-205.

粕谷祐己「スタンダールのアラビア」、p.257-261.

小林亜美「スタンダールの小説における絵画の役割とその重要性：人物描写の問題を中心に」、p. 281-286.

杉本圭子「邦訳の際の校訂版の活用について：『赤と黒』を例に」、p.195-199.

高木信宏「小林秀雄の「モーツァルト」：象徴派の好敵手、スタンダール」、p.273-279.

西川長夫「日本におけるスタンダール受容の問題：〈私〉はいかにスタンダールを読んだか」、p.47-54.

山本明美「ロラン夫人の『回想録』：理想の読者を代表する「幸福な少数者」」、同上、p.263-266.

ジュリー・ブロック 「読むことの記録：クレヴの奥方とジュリアン・ソレル」 p.79-82./「大岡昇平『わがスタンダール』を翻訳する：引用の効果」p.213-219.  
他5本

Brock, Julie (éd.), Réception et créativité - Le cas de Stendhal dans la littérature japonaise moderne et contemporaine, vol. 2, Berne, Peter Lang, 2013.  
(vol. 1 は2011年に刊行済み)

杉本 圭子

・「グルノーブルとスタンダール」(項目執筆)、『フランス文化事典』、田村・塩川・西本・鈴木編、丸善出版、2012、p.566-567.

高橋 久美

・博士論文「シャトーブリアンにおける自由の表象」(« La Représentation de la liberté chez Chateaubriand »)早稲田大学大学院文学研究科フランス文学専攻、2012年2月受理、7月付博士号取得

田戸カンナ

・「デュラス公爵夫人作『ウーリカ』翻訳と解題(上)」、『学苑』(昭和女子大学)第859号、2012年5月、1~17頁。

・「デュラス公爵夫人作『ウーリカ』翻訳と解題(中)」、『学苑』(昭和女子大学)第862号、2012年8月、18~33頁。

・「デュラス公爵夫人作『ウーリカ』翻訳と解題(下)」、『学苑』(昭和女子大学)第869号、2013年3月、29~44頁。

・日本民主主義文学会第28回土曜講座「スタンダール『パルムの僧院』」(*La Chartreuse de Parme* de Stendhal)、2012年10月13日



スタンダール

### 【編集後記】

今号より本研究会の会報担当になりました。前任の杉本圭子さんより「会報作業マニュアル」なるものまで頂きながら、様々な作業が遅くなってしまい、多くの方にご迷惑をおかけ致しました。この場を借りてお詫びさせていただきます。

通常の研究発表要旨に加え、杉本さんから書評、寺西さんからエッセーなどを寄稿して頂き、なんとか発行へと漕ぎつけることが出来ました。毎春、ただただ手に取ることを楽しみにしていた「スタンダード研究会会報」。編集人となった今、会員の協力なしには成り立たないことを痛感しました。過去 22 号の編集人への尊敬と、受け継いだ重みを噛み締めています。

角津美愛